

【使徒書日課】使徒言行録 12章1～17節

¹そのころ、ヘロデ王は教会のある人々に迫害の手を伸ばし、²ヨハネの兄弟ヤコブを剣で殺した。³そして、それがユダヤ人に喜ばれるのを見て、更にペトロをも捕らえようとした。それは、除酵祭の時期であった。⁴ヘロデはペトロを捕らえて牢に入れ、四人一組の兵士四組に引き渡して監視させた。過越祭の後で民衆の前に引き出すつもりであった。⁵こうして、ペトロは牢に入れられていた。教会では彼のために熱心な祈りが神にささげられていた。

⁶ヘロデがペトロを引き出そうとしていた日の前夜、ペトロは二本の鎖でつながれ、二人の兵士の間で眠っていた。番兵たちは戸口で牢を見張っていた。⁷すると、主の天使がそばに立ち、光が牢の中を照らした。天使はペトロのわき腹をつついて起こし、「急いで起き上がりなさい」と言った。すると、鎖が彼の手から外れ落ちた。⁸天使が、「帯を締め、履物を履きなさい」と言ったので、ペトロはそのとおりにした。また天使は、「上着を着て、ついて来なさい」と言った。⁹それで、ペトロは外に出てついて行ったが、天使のしていることが現実のこととは思われなかった。幻を見ているのだと思った。¹⁰第一、第二の衛兵所を過ぎ、町に通じる鉄の門の所まで来ると、門がひとりでに開いたので、そこを出て、ある通りを進んで行くと、急に天使は離れ去った。¹¹ペトロは我に返って言った。「今、初めて本当のことが分かった。主が天使を遣わして、ヘロデの手から、またユダヤ民衆のあらゆるもくろみから、わたしを救い出してくださったのだ。」¹²こう分かったペトロは、マルコと呼ばれていたヨハネの母マリアの家に行った。そこには、大勢の人が集まって祈っていた。¹³門の戸をたたくと、ロデという女中が取り次ぎに出て来た。¹⁴ペトロの声だと分かったと、喜びのあまり門を開けもしないで家に駆け込み、ペトロが門の前に立っていると告げた。¹⁵人々は、「あなたは気が変になっているのだ」と言ったが、ロデは、本当だと言い張った。彼らは、「それはペトロを守る天使だろう」と言い出した。¹⁶しかし、ペトロは戸をたたき続けた。彼らが開けてみると、そこにペトロがいたので非常に驚いた。¹⁷ペトロは手で制して彼らを静かにさせ、主が牢から連れ出してくださった次第を説明し、「このことをヤコブと兄弟たちに伝えなさい」と言った。そして、そこを出てほかの所へ行った。

【福音書日課】 マタイによる福音書 14章22～36節

²²それからすぐ、イエスは弟子たちを強いて舟に乗せ、向こう岸へ先に行かせ、その間に群衆を解散させられた。²³群衆を解散させてから、祈るためにひとり山にお登りになった。夕方になっても、ただひとりそこにおられた。²⁴ところが、舟は既に陸から何スタディオンか離れており、逆風のために波に悩まされていた。²⁵夜が明けるところ、イエスは湖の上を歩いて弟子たちのところに行かれた。²⁶弟子たちは、イエスが湖上を歩いておられるのを見て、「幽霊だ」と言っておびえ、恐怖のあまり叫び声をあげた。²⁷イエスはすぐ彼らに話しかけられた。「安心しなさい。わたしだ。恐れることはない。」²⁸すると、ペトロが答えた。「主よ、あなたでしたら、わたしに命令して、水の上を歩いてそちらに行かせてください。」²⁹イエスが「来なさい」と言われたので、ペトロは舟から降りて水の上を歩き、イエスの方へ進んだ。³⁰しかし、強い風に気がついて怖くなり、沈みかけたので、「主よ、助けてください」と叫んだ。³¹イエスはすぐに手を伸ばして捕まえ、「信仰の薄い者よ、なぜ疑ったのか」と言われた。³²そして、二人が舟に乗り込むと、風は静まった。³³舟の中にいた人たちは、「本当に、あなたは神の子です」と言っておびえ、イエスを拝んだ。

³⁴こうして、一行は湖を渡り、ゲネサレトという土地に着いた。³⁵土地の人々は、イエスだと知って、付近にくまなく触れ回った。それで、人々は病人を皆イエスのところに連れて来て、³⁶その服のすそにでも触れさせてほしいと願った。触れた者は皆いやされた。

「来なさい」【こども説教のために】

今日も、朝、眠りの中にいた皆さんの枕元に主イエスがおいでくださって、「来なさい」と、教会にお招きくださいました。

主イエスが五千人の人にパンを食べさせてくださった出来事の後のことです。弟子たちは、主イエスを置いて舟で湖を渡ろうとしていました。主イエスが**弟子たちを強いて舟に乗せ、向こう岸へ先に行かせよう**となさったのです。一人残られた主イエスは、山に登って祈られていました。弟子たちの舟は向こう岸を目指しましたが、逆風のため向う岸に辿り着く前に夜が明け始めました。弟子たちは、一晩中、舟の中にいたのです。そこに、主イエスが近づいて来られました。湖の上を歩いておいでなのです。ところが弟子たちは、それが主イエスだと気づきません。おびえ、恐れ、叫び声を上げる始末です。けれども、主イエスの声が響きます、「**安心しなさい。わたしだ。恐れることはない**」と。弟子たちは、ようやく落ち着きを取り戻しました。弟子の一人、ペトロは、余程うれしかったのでしょう、思わず言います、「**主よ、あなたでしたら、わたしに命令して、水の上を歩いてそちらに行かせてください**」と。主イエスは、もちろん、おっしゃいました、「**来なさい**」と。

わたしたちは、主イエスをお迎えした教会という「舟」に招かれてきました。ここで、わたしたちは主イエスと共に「神の子」としていただくのです。

「安心なさい」

先週、石神井教会の第二代牧師でいらした齋藤友紀雄先生が逝去されました。今週金曜日、先生が晩年に縁があって出席教会とされていた救世軍杉並小隊の礼拝堂で、ご葬儀が執り行われます。石神井教会の牧師でいらしたのは50年以上前ですから、当時を知る人は少ないかもしれませんが、齋藤先生は石神井教会を辞された後、いのちの電話の働きなどに従事され、どこかの教会に牧師として仕えることをされませんでしたから、ご家族はそのまま石神井教会員として歩んでくださっていましたし、先生ご自身もコロナ禍前までは石神井教会にも毎年のようにご奉仕においでいただいていたのです。そのような交わりを保っていたことからの、5年前のコロナ禍一年目にお連れ合いが逝去された際の埋葬式も、また、このたびの先生のご葬儀も、わたしが司式させていただくこととなったのです。

少し離れた教会でのご葬儀ですから、石神井教会の皆さんの参列は限られたものになるかもしれません。けれども、この機会に、皆さんにあらためて、齋藤先生のお働きについて憶えていただきたいと思うのです。世間的な意味で高い評価を得てこられたということについて、ではありません。伝道者として召命を受け、初任地・阿佐ヶ谷教会で5年、続く石神井教会で7年、伝道師・牧師として仕えられた先生が、その後、教会に仕える働きを離れて、教会ではない他の所での働きへと出て行かれ、そこで伝道者としての生涯をまっとうされた、ということについて憶えていただきたいのです。

2017年8月の主日礼拝に説教者としてお招きした際、ご自身の伝道者としての歩みを振り返ってお語りくださいましたが、石神井教会を辞して新しい働きに仕えられたときのことについて、多くを語られるのを避けられました。教会に仕える働きを離れることについて、ご本人にも、また当時の教会にも、葛藤があったのではないのでしょうか。それでも先生が新しい働きに出て行かれたのは、そこに「来なさい」とお招きくださる主イエスのお姿を見出されたからに違いないと思うのです。

弟子のペトロが湖の上を漂う舟の中から湖上を歩く主イエスを見出したとき、彼が無鉄砲にも湖の上を歩こうとしたことを、わたしは、彼の衝動的な性格の表れとしか考えて来ませんでした。彼は、いつでも衝動的に発言し、衝動的に行動するのです。けれども、それは単なる性格の問題ではないのかもしれませんが。主イエスに対する信頼なのでしょう。このお方に対する愛なのでしょう。このお方を見出したところに、自分も居らずにいられないのです。このお方と同じように、自分も行動しないではいられないのです。舟の中に他の弟子たちを残しても、ペトロは、主イエスのいらっしゃる湖の上に踏み出して行かずにはいらなかったのです。

「行かせてください」

金曜日の葬送告別式を前に、明日、齋藤先生のご家族とご納棺を執り行うお約束をしています。納棺に際して、わたしは、キリスト教では古くから舟型のお棺が用いられてきたこととお話することがあります。キリスト教の中には、そういう伝統があるのです。もっとも、棺を舟型にする習慣は、世界中に広くあるようです。日本でも、皇族の納棺儀式は「御船入りの儀」と呼ばれます。それでも、納棺に際して棺を舟型にしてきたキリスト教の伝統についてお話しするのは、そのようにしてきた先達が、地上に建てられた教会をこそ船に模してきたからなのです。

教会の建物自体を「ノアの箱舟」のような船に模して建てた先達もいました。今でも、そのようなデザインで新しく会堂が建てられることもあります。もちろん、そのようにするのは、教会という信仰共同体が一つの舟に乗り合わせる者たちの集まりである、という意味を込めてのことでしょう。

五千人の人々にパンを食べさせた出来事の後、弟子たちは、主イエスに強いられて舟に乗り込みました。まるで、それまで彼らを取り囲んでいた大群衆から隔離するように、この世の喧騒から引き離すように、彼らだけで居られる舟の中に集めて、先に行かせられたのです。

この湖の出来事を、教会は大切に語り継いできました。パンの出来事と共に、弟子たちの最初の教会の時代から、繰り返し語り聞かせてきたのです。それは、この湖の出来事の中に、教会の姿を見出してきたからでしょう。

日曜日の朝、わたしたちは皆、それぞれの日常の生活の場から離され、日々の煩いを一時だけ忘れて、自分たちだけで居られる教会堂に集められているのです。ここにいる間は、家族や取引先があれこれと用事を言いつけてくることもありません。もちろん、いつまでもここに居続けるわけにはいかないでしょう。湖を行く舟も、難儀して漂うときが長くなっても、いずれ向こう岸に辿り着いて、陸地に戻って行かなければなりません。

そうであっても、わたしたちは、ここに集められているのです。ご自分の弟子たちを強いて舟に乗せようとなさる方がいらっしゃるからです。強いてご自分の教会にお集めになれる方がいらっしゃるからです。そこにおいでくださって、「**安心しなさい**」とおっしゃってくださる「**神の子**」がいらっしゃるからです。

このお方が、わたしたちの再び出て行くべき所をお示しくくださるのです。わたしたちが立つべきところに、先にお立ちくださるのです。「主よ、あなたのお立ちのところに**行かせてください**」と言う者に、そのお方は、「**来なさい**」とお招きくださるでしょう。そう、分かる日が来るのです。「**今、初めて本当のことが分かった**」という日に、わたしたちは、水の上を歩き始めるのです。